

「村」的共同体論の本質と意義
——谷川雁と石牟礼道子

論
説

「村」的共同体論の本質と意義

——谷川雁と石牟礼道子

伊
藤
洋
典

1、問題の所在

戦後日本の民主化を思想的に支えたといわれる、いわゆる近代主義的思想における個人を核とした社会変革と民主化に対抗して、むしろ集団創造をいい、日本の民主化の阻害要因とされた「村」について、それを払拭されるべき過去の残滓としてではなく、あえてその言葉によって社会変革を主張した谷川雁の思想を立脚点として眺めたと「村」という表象が社会変革のイメージを先導した時期が確かに存在した。「村」はコミュニケーション、共同体、あるいはまたコミュニティという別の用語と深い関係をもちながら、さまざまに語られ、社会変革のイメージを先導したのである。

本稿は、この「村」という言葉に着目し、この言葉がなぜ社会変革を先導するイメージたりえたかを考察することを目的としている。いわゆる近代主義的政治学として位置づけられる丸山眞男、神島二郎、松下圭一らによって、日本の軍国主義あるいはファシズムの温床として批判された「村」が、なぜ変革のシンボルとなったのか。この言葉にはどのような内実が伴っていたのか。この問いを、特に意識的に「村」を革命的シンボルとして用いた谷川雁の「村」観を通して考えてみたい。詩人であり、共産党員でもあった谷川（のちに脱党）の活動は、その独自性において大きな影響力をもった。その中で、彼が革命の目指す先に指定したのが「村」であった。しかし、革命によって実現される「村」とは何か。

そして、さらに、ここではもう一人、石牟礼道子を取り上げる。石牟礼の活動は、初期には谷川とともにあったが、その後、水俣病の発生とともに独自の境地を切り開くことは周知のとおりである。石牟礼もまたその活動を導く手がかりを「村」という表象においている。もともと石牟礼は革命を目指すことも訴えることもない。その主張

は端的に「村」的共同体の喪失が人間の根本に関わる事柄であることの訴えである。このような主張が、単なる懐古趣味的な「村」の主張を超えるのはいかにしてか。そして「村」が先鋭的な批判力を持ちえたのはなぜか。

本稿ではこの二人の思想を対象として、「村」的共同体がもった本質と意義を明らかにすることが目的であるが、本論に入る前に、この二人が位置する時代の文脈を概略的に述べておきたい。

右に述べたように、「村」という言葉は、戦後、日本の近代化、民主化に対する障壁として糾弾される言葉であったが、しかしながら、特に一九七〇年代ごろから共同体再評価の一端を担う概念として「村」は言及されるようになる。これは「村」という言葉や、これと類似した概念として共同体、コミュニティといった言葉で表現される人々の共同性や連帯がこの時代に求められたという事情を背景としている。周知のように、高度経済成長による社会の構造変化、共同性の喪失といった事象に対応して『コミュニティ—人間性の回復のために』という報告書が出たのが一九六九年である。開発による地域の変容や破壊が大きな社会問題となるなか、さまざまな市民運動、住民運動とともに、共同体やコミュニティが至るところで主張されるようになってくる¹⁾。こうした潮流のなかで、共同体やコミュニティの原型として日本の村に目が向けられるようになったといつてよい。ファシズムの担い手という評価から正反対に時代の困難を乗り越えるための原点として位置づけられるようになったのである²⁾。

もともと、ここで取り上げる谷川はすでに五十年代から「村」を主張し、その主張は、彼が中心的に担った「サークル村」という雑誌で展開されていた。広く知られてはいるが、この「サークル村」という雑誌について若干説明をしておきたい。「サークル村」は、当時全国的に広がっていたさまざまなサークル運動の一つであった。敗戦後盛んになるサークル運動は共産党によって主導された面が大きい³⁾が、大沢真一郎は、サークル活動は、民衆が自らの体験や関心を共同で掘り下げていこうとする活動であり、自由な結びつきのなかで、「民衆自身の世界を自らの

手で表現していく」ことであり、そのような活動によって生まれた共同体は、「権力から自立した民衆の世界を創造していく」基盤となると述べる。³⁾ 大沢は、サークル運動を、敗戦後から55年体制の前まで、55年体制成立の時期から61年まで、そしてその後という三つの時代に区分しているが、⁴⁾ 谷川らが始めた「サークル村」の運動はこのなかでは第二の時代にあたる。第一期は天皇制を中心とする体制の崩壊を契機として、新たな秩序形成の動きと連動する形で、戦前的な集まりもあれば、戦後のな、例えば労働組合による職場サークルなどが混じり合った時期である。第二期には、大衆社会状況の成立という時代状況の中で、うたごえ運動や学習サークル、後の原水禁運動の母体となった「杉の子会」、あるいは自らの遺体を解剖実習に提供する「白菊会」、地方出身の若者の集まりである「若芝の会」など、多くのサークルが叢生し、運動のピークを迎える。このピークに当たる時期に谷川雁らの「サークル村」の運動も始まるのである。個人ではなく、あえて主体としての集団を訴えた「サークル村」という雑誌に多く人が集い、そこでの表現活動を通じて新たな文化を生み出そうという運動であった。この運動から上野英信、石牟礼道子、森崎和江、河野信子らが輩出したのは周知の通りである。第三期は、高度経済成長による公害などに反対する住民運動やベトナム戦争の激化に対する反戦運動などが登場した。このときも、「抵抗と解放の根拠地としての共同体（コミュニティ）」や生産と生活共同体への志向をもつサークルが全国のあちこちに生まれた。⁵⁾

さて、このようなサークル状況を背景として、右にも述べたように、本稿では谷川雁、石牟礼道子のいう「村」という言葉に焦点を当て、その意味するところ、およびその意義を明らかにする。「一つの村を作るのだと私たちは宣言する。奇妙な村にはちがいない。薩南のかつお船から長州のまきやぐらに至る日本最大の村である。」⁶⁾ このような谷川雁の「村」、そして「日本の〆村〴〵がこのようにとどんどん死んでいく。この国を生み育ててきた村が。」⁷⁾ という石牟礼道子の「村」は何を意味するのか。本稿の問いはこれであるが、ただ、「村」という言葉は、彼らの

中では、共同体、コミュニケーションなどの言葉と互換的に使われる場面が多い。本稿でも、大体において互換的に用いるが、基本的には彼らの思想の根本を「村」という言葉で示し、「村」的共同体と呼ぶことにする。

ただ、あらかじめ断っておかねばならないが、本稿では「サークル村」の運動それ自体を総体として取り上げるわけではない。また谷川雁や石牟礼道子の思想を全体として明らかにするというのでもない。ここで扱うのは、「村」という言葉で表現された共同体の意味を問うということに尽きる。「サークル村」の運動については近年多くの研究が出ており、また谷川雁その人、あるいは石牟礼道子その人についても、多くの研究がある⁸⁾。詳細な検討に立ち入ることはできないが、概観としていえば、谷川の「村」という言葉については、「農村」や「アジア的共同体」「辺境」という言葉に重点を置いて、前近代的な共同体と重ねて、近代批判の立脚点とするという構図で捉えているものが多い。いうなれば、「民衆の連帯」という本質的契機を農村や辺境といった、社会の底辺層や体制から疎外された層に見出し、そこに共同体形成の契機を発見するというイメージで捉えられる。谷川や石牟礼が単なる伝統回帰主義者ではないことはいうまでもないとして、こうした議論に一定の説得力があるのはそのとおりであろうが、しかし、谷川のいう「村」はそれほど具体的あるいは実体的なものなのだろうか。谷川は実体としての村に何かを見出したのだろうか。この点は、石牟礼の「村」については多少当てはまる部分もあろう。しかし、石牟礼の「村」もその本質において実体的な村を想定しているといつてよいのだろうか。そしてそれが高度経済成長という波に流されてしまったという診断は正しいのだろうか。むしろ、「村」は高度形成成長期およびその後こそより強く求められたのではなかったか。

「村」という言葉は、かつてあったはずの共同体を指すのではなく、彼らの思想においては現状変革のための梃子となる概念であり、意識的かつ戦略的に用いられた概念ではなかったろうか。いうなれば、「村」は不在であるか

からこそ、思想的影響力をもちえたのではないだろうか。本稿では、こうした観点から彼らの「村」を読み解いていく。

2、谷川雁の「村」

「村」について述べる前に、「サークル村」の運動について簡単に述べておく。

「サークル村」とはいかなる運動であったか。無論、これは政治運動というよりは文化運動であり、この雑誌に集うメンバー間の交流を通じて啓蒙主義的社会変革の論理を超える新しい集団文化を生み出そうとする運動であったことは周知のところであるが、大沢真一郎も指摘しているように、その基本的な性格として反体制運動であることは確認されておかなければならない。今更のような指摘のようにもみえるかもしれないが、森崎和江もサークル村が「反権力集団」であったことを指摘している。ここでこの指摘を強調するのは、森崎の次のような指摘に着目しておきたいからである。少々長いが引用しておく。

「けれどもこの事務局を中心にした運動の移行は、集団がもつ占有感覚の止揚に対する関心というよりも、それの有効な行使に対して、観点が転じたことを意味していた。このことについて思想的追及を行なうことは、『サークル村』に限らず反権力集団の体質が、国家原理と類似しがちな面を越えるための体制なポイントである。

民衆の集団に付随する内的共有と外的占有は集団員にとっては、自己発願のための否定的媒体である。それは民衆の伝統的な共同体によってつちかわれた傾向性であるために、あらゆる集団に再生産されるけれども、人々はその必要悪的病

識を媒介としつつ共通の思想性に立つ集団を形成させ、その止揚をめざしつつ、集団員の直接性を發揮し得る新しい集団を創造せんと志すのである。それは日本の民衆にとつては、真の意味での、われらの共同体の幻影であつて、民衆は伝統的共同体をいつでも自己にとつて擬制的なものであるとし、その限界を食い破らんために、くりかえし集団を形成するのだ。」⁹⁾

つまり、反権力集団の形成は、個々の成員が即自的自己を乗り越え、新たな連帯の思想を共有する集団を形成することができるようになったときのみ、一部の指導的な部分に依拠しない真の意味での「自分たちの」共同体を形成することができるというのである。それができないときには、その集団は抵抗している相手である国家の原理をそのまま自分たちの中に持ち込むことになるという認識である。森崎は、この新たに生まれ出でるはずの共同体を「幻影」と記している。無論、これは否定的な意味ではなからう。容易には達成できない目標であればこそ、それは差し当たっては「幻影」としてしか見えないものであらう。

ところで、ここで反権力集団であつたことを強調したのは、反権力集団は容易に権力集団へと転化しようということを用いたためではない。強調しておきたかつたのは、この「幻影」としての共同体という指摘である。革命を目指す集団は、それ自体として反体制の闘争を戦う力の集団として自己規定するのではなく、その集団が目指すべき共同体としての姿を体現しなければならぬという自己規定が、「サークル村」という集団の存在と活動を困難な集団にしているが、同時にそうであるがゆえに、その集団は文化集団としての意義をもつのである。つまり、この文化集団は、社会のトータルな変革を訴えるために、自らその目指す社会の原型を示そうとするのである。そしてこの原型は「幻影」としてしか感知されないとところにその本質があるといつてもよい。幻影は、しかしこの場合、

単なる幻という意味ではなく、実体としてそこにないからこそ、逆説的に、繰り返しの集団形成を促す力をもつのである。それはちょうど、谷川が工作者について述べた、「顕在するものを解体し、潜在するものを結晶化しなければならぬ創造者の運命は一にかかって真の対立者を自己の内部に発見できるかどうかにか左右されます。」あるいは「私は『原点が存在する』と言いました。だがそれは決して顕在することのないものです。顕在しないものが存在として認める力、それはいうまでもなく計画された認識の機構を必要とします。」⁽¹⁰⁾などの言葉と平仄の合うものとして理解しうるものであろう。この点はまた後に言及する⁽¹¹⁾。

ところで、こうした共同体を目指すのが「サークル村」の意図であるとすると、谷川がいう「村」とは何か。佐藤泉のいうところをみると、佐藤は谷川の「村」は、「個人主義の対立物として語られてきた古典的な共同体ではなく、戦後の思想布置そのものを組み替えることによって想像可能となったコミュニティである」と述べている⁽¹²⁾。ここでいう「思想的布置」とは、自立した個の確立という近代主義的目標からみると、「ムラⅡ村落共同体」はその最大の弊害として位置づけられる。他方で、個人主義がもたらす「寄る辺なき個」という弊害を考えると、個が帰属すべき共同体こそが個々人に安定したアイデンティをもたらしものとして評価されることになるが、こうした二項対立的状況が、佐藤のいう「思想的布置」である。谷川の「村」が近代主義に対立していたとはいっても、それが保守的な古い共同体への回帰を訴えたものではないことは、その通りであろう。そうでなければ「サークル」とは結合しえない。問題は、では何であるのかということだ。

佐藤は谷川の「村」は「創造的な開放性をそなえた非場所の共同体」と表現している⁽¹³⁾。谷川の「村」を表現すれば、このような表現にならざるを得ないということであろうし、それはそれで理解できることであるが、しかし、谷川のいう「村」は実在しない村であるから当然に「非場所」であろうし、「開放性」というのは「閉鎖的」では

ないということを指摘しているのであろうが、「開放的な共同体」というのは、分かるようで実はよく分からない概念である。「開放的」というのは「境界線を設定しない」という意味のようであるが、境界線のない共同体とは、これも分かりづらい概念である。

その分かりづらさというのは、たとえばこうである。「サークル村」が始まって一年が経つ頃、森崎和江は次のように記している。

「共同体的連帯は、同時に他の共同体組織からの分離を意味しました。その凝縮の機能を私達は体表から忘れ去ることができません。」⁽¹⁴⁾これは大衆のエネルギーがさまざまな渦に分裂し、それぞれの渦が共有されないことへの危機感を表したものであり、連帯の困難さを指摘するものである。いわば個人へと分解していく共同体を維持する契機は何かを問うものである。谷川もまた執拗に問うたのは、集団の連帯のエネルギーをどこから引き出すかという問題であった。集団をどう開くかではなく、どう凝集させるか、これが問題であった。そして、凝集というのは、常に他とは区別されるという何がしかの意識なり形なりと引き換えでなければ手に入れることは難しいだろう。出入り自由ではなく、出入りにはそれなりの覚悟が求められるのである。であるとすると、「開放的」な共同体というあり様はさらに考えるべき要素を含んでいるようにみえる。

そこで、ここでは少し異なる観点から探ってみる。

谷川は、自ら求める「村」のイメージを古い村落共同体などの言葉を使って語ることがしばしばあった。そのため、谷川の「村」を、村落共同体を原型として捉えるという議論もあった。たとえば、水溜真由美は、谷川は一九五〇年代の評論において「前近代的な性格を持つアジアや農村の共同体を肯定的に論じた」と述べ、またその時期の谷川の詩にも「アジアの村や村落共同体のユートピア的なイメージが繰り返し出現する」とも述べ、谷川に民衆回帰

的思想を見出す。それはユートピア的でノスタルジックな共同体イメージであるとして、この共同体の静態的な連帯イメージから革命性を引き出すために、「工作者」が要請されるとする。¹⁵ たしかに、谷川がいう共同体や「村」が古い村落共同体のイメージで語られていることは、多々みられることである。少し引用してみると、

「日本の民衆が永きにわたってあこがれ、民衆自身が分けもっている乳色の素肌の光り…それは下級の村落共同体から流れ出し、今日の大地をなお蔽っている規模の小さな連帯の感情ではありますまいか。この東洋の村の思想こそこの世の壁の幾重を通して貧しい私のなかに流れ入った光りの本体ではありませんまいか。」¹⁶

「故郷」とはいうまでもなく自分の存在の歴史を幾世代の因果の微分方程式として見ることのできる地点であろう。すなわちこの世の革新には故郷…自分を構成する古く遠い因果律とそれを動かすための梃子の支点…が必要である。故郷を敵とする者は故郷と正対しなければならぬ。¹⁷ そして、「故郷と革命…この二つのイメージを寸分のゆらぎもなく噛合わせること」が自分の仕事であるというとき、谷川のいう「村」を村落共同体とみることもできなくはないようにみえる。

しかし、この「村」は今日もはやその姿かたちを変え、農民世界ではなく、工場にあるという。

「古い型の村落はとうにひっくりかえっています。しかしそれは近代主義者や一部の革命家がいまのように消失したのではなく、裏返されたにすぎないのです。むしろ悪しき意味での村はもつとも高度な偽装をもって、いま工場のなかにあります。そこにあるのは近代の個人主義ではなく、農民のエゴイズムです。この裏返しは動力はいまでもなく資本です。だから工場を村と把握する眼でみる者だけが、いまや村がひとつの工場と変わったことを発見できるのです。」¹⁸

これらの文言は、仮に村落共同体のイメージで語られているとしても、何らかの具体性に基づいた議論とはいえ

ないだろう。谷川が自分の体験から民衆の中に愛に満ちた共同体を見出したとしても、それは谷川が「見た村」というよりは、「見たかった村」ではないという保証はない。むしろ、革命のための足場を必要としていた谷川にとつて「村」は戦略高地であったとしても不思議ではない。いうなれば谷川のノスタルジーは戦略論として語られているともみえるのである。そうであればこそ、谷川は「工作者」として農民の世界を労働者につなぐ役割を自らに当たったのではなかったか。

つまり、「村」は相当の抽象度をもって理解されなければならないということである。谷川は「上級の共同体」の下部を構成する「小さな諸共同体」を、専制に対する抵抗の拠点にもなり、同時にアジアの諸芸術発生の震源地にもなったといい、「氏族共同体はもとより村落共同体においてもその存立の軸となっていた横の連帯はしだいに『義は君臣にして情は父子』の縦の支配にすりかえられていったが、…」と述べ、¹⁹⁾「村」の本質が民衆のなかにある「横の連帯」にあることを示している。そして、「サークル村」の活動自体がそのような真の連帯を作り出す活動であるとす。つまり「村」は、何らかの歴史的な実体を指しているのではなく、それ自体、獲得されるべき対象でもあったとみるべきであろう。

しかし、戦後の高度成長期に差し掛かった時期にそのようなイメージを語ることは、北川透がいうように、「すぐくロマンチックに過ぎて、それが一面ではどうしようもなく甘っちょろく映る」²⁰⁾ことは容易に想像できる。また、「サークル村」に集ったメンバーからも「谷川は古い共同体的契機を信仰のように語っているが、サークルの内面的契機と古い共同体的契機が、その純粹さにおいて同じ根をもつとはいえ、生産の発展と社会構造の変化に従って階級分裂から近代的個人への歴史的な人間形成の客観的、歴史的条件を越えて民族の伝統をわれわれの時点に結実させるということが、谷川の表現では、どうも詩的なイメージとしてだけで現実感が受けとめがたいのである。」

といった批判がなされており、あえていえば、掴みどころのないイメージ、「思いつき」として感じられたことが告白されている。²¹あるいは「工場のなかの村」とき谷川雁ははたして何を感じていつているのかとしばらく自分の目で正確に見て、かれを断定させたものを自分の言葉に翻訳するよりほかない。²²

ここまでみてきた谷川の「村」、つまり「民衆の横の連帯」は、古い村落共同体に彼が見出したとされるが、いうまでもなくそれは村落共同体そのものではなく、工場のなかにも、つまり労働者の連帯にも見出されるものであるということになる。それが甘っちょろいかどうか、思いつきにすぎないかどうかは、ここでは措くとして、ここで強調したいのは、それを見出すのは、古い村落共同体ではなくてもよいということである。それはどこにでも見出せるものであり、その意味で抽象的な概念であるということである。そして、抽象的であったがゆえに、逆説的ではあるが、「現実」に対する「ヴィジョン」としての位置をもちえたのである。もしこれが抽象的でなく具体的な概念であれば、その真偽が問われ、運動の原理とはなりえないであろうことは容易に想像がつく。

むろん、この抽象性はヴィジョンとしての力をもちえることもあれば、そこに集った人びとに何がしかの戸惑いを与えることもある。しかし、抽象的なイメージであったがゆえに、それは実体としての根拠云々を超えて、人びとに対する訴求力をもっていたといえるのである。²³「世界の映像を裏返さないかぎり、永久に現実を裏返すことはできない。イメージから先に変れ！これが原点の力学である」²⁴

ただ、この訴求力には条件がある。谷川がこのイメージの現実的基盤を「日本文明の一番下に生きている」として、それを掘り起こして「新しい共同体の基礎にしなければならぬ」というとき、抽象的とはいえ、イメージ喚起のためには、どこかにその破片なりが見出されなければならないという要請がある。それは体制に取り込まれた部分ではなく、未だ取り込まれていない「日本の一番下」、たとえば南九州であったり、部落民であったり、娼婦

であったりといった、一般的にみて、体制から疎外された部分、人びとに見出そうとした。つまり現実との接点なくしては、イメージは文字通り単なるまぼろしとなり、世界を変えるイメージ足りないということである。現実を裏返すイメージとは、現実との接点をもちながらも、その現実を超えた現実を投影できるほどに超越していなければならぬ。いかなければ、絵空事ではなく、現実を超えた現実という条件である。したがって、個別具体的な問題を解決すればよいというものではなく、全体としての現実を否定し、新たな現実を作り出すことが問題なのである。

ここでまとめるために、小野十三郎の言葉を引いておきたい。小野は、谷川がいう「村」について黒田喜夫と比較しながら次のように述べている。「九州の農村も東北の農村も知らない私は、この土俗的という言葉もあまりかたんに使えないけれど、農村的現実ということに即して、コミュニティの夢を追うと、黒田君のそれに近いところに行く。九州の村よりも、川崎の重工業地帯である。谷川雁が『村』の想念によってかきおこすコミュニティは、ここをつづめたさらに遠くにある。現実からよりもユートピアからの方が距離が近い。したがって、この詩人がそこに連帯の場を見出した農村的現実も、そこから生まれるコミュニティの想念も抽象的だ。」⁽²⁷⁾谷川本人はこの「ユートピア」という言葉は受け入れたいかも知れないが、しかし、ここではあえてユートピアとして捉えてもよいのではないか。あるいは捉えた方がよいのではないかという観点で総括したい。

ここで想定しているのは、K. マンハイムのいうユートピア概念である。マンハイムは、「ユートピア意識とは、まわりの『存在』と一致していない意識である。…われわれがユートピア的と呼ぼうとするのは、現実を超越した方向づけのうちでも、とくに、それが行動に移されると、そのつどの現実の存在秩序が、部分的もしくは全体的に破壊されるようなものだけである。」⁽²⁸⁾と述べる。既存の秩序を破壊し、「自分の観念に合うように変形することがで

きる」のがユートピアの特徴であると述べる。⁽²⁹⁾ もう少しマンハイムのいうところ引用しておく。「したがってはじめるは一見孤立的個人が、ある階層のためにユートピアをつくるとしても、けっきょくのところ人はこのユートピアを、この個人の仕事と一致するような集合意思をもっていった階層に帰属させることができる。：孤立した個人は、自分の力で歴史的、社会的な存在の秩序を破壊することはできない。そうとすれば、すでにその理由だけでも、われわれの定義する意味での現実的力をもつユートピアは、所詮個人の作品ではありえない。個人のユートピア的意識が、すでに社会的空間のうちに存在している個々の傾向を把握し、それを代弁しているときにのみ、またその形で全階層の意識のうちに流れ込み、その階層によって行動に移されるときにだけ、現存の存在秩序に対抗する力をもった存在の現実が成りたちうる。」⁽³⁰⁾

谷川が「横の連帯」の在処とした故郷あるいは土着のエネルギーと表現されながら、しかし、その村の核心にあるのは無であり、抽象的な「原点」としか表現されないどこかこそが谷川の「村」である。⁽³¹⁾ そして、故郷と土着を求めながら、そこを突き抜けて抽象に至り、その抽象が現実へ逆流し、現実を破壊すること、これが谷川という革命であったといえる。それはまさにマンハイムのいう「現実を破壊する力」を持ったユートピアであったといっただろう。

谷川は百姓一揆について次のように述べたことがある。「飢饉に苦しみつづける彼等の心の火をつけたのは、いわば村のユートピアともいふべきまぼろしではなかったでしょうか。」⁽³²⁾ このような抽象的な「幻影」の力こそ、谷川の「村」がもったインパクトであった。そして忘れてはならないのは、この運動によって闘い取られる共同体は、「反権力」運動の結果として権力が無化された世界、新しい別の共同体であるということである。権力のない共同体という幻影は、しかしながら、権力を相手とする以上、政治闘争を勝ち抜いて闘い取られなければならない。谷川の

「村」はこうして論理上政治闘争と裏表の関係にある。この党派性を免れない本質が、「サークル村」の活動が個人表現活動に純化されなかった原因でもあり、またこの運動が長く続かなかつた原因の一つであるかもしれない。「サークル村」の主要なメンバーが労働組合の組合員であったこともこのことを裏付けている。政治闘争が活動の大きな部分を占めれば、政治闘争に関心を持たない一般のメンバーからみたととき「浮いている」と映つても不思議ではない。高度経済成長の大きな波に大衆が呑み込まれていくとき、党派的活动はメンバーから「浮く」ことは避けられず、党派闘争の道具と見なされれば、それはもはやユートピアではない。政治的力は大きく削がれることになる。

もつとも「サークル村」の政治性については、深く立ち入ることは避けて別の機会に譲るとして、ここでは谷川の「村」がもつユートピア的力を確認するにとどめておく。次に石牟礼道子の「村」をみていく。

石牟礼道子の「村」

「サークル村」の活動から出発した石牟礼の主な活動時期は大沢の区分で言えば、第三期に当たる。この時期は、開発政治や公害による地域破壊が顕著になった時期でもあり、共同体やコミュニティへの希求がより一層強まった時期でもある。また中央に対する地方という構図も強く意識されるようになった時期でもある。そのため、詩的抽象性を帯びた谷川の「村」や共同体と比べて、石牟礼のいう「村」や共同体は谷川よりも具体性の強い形で提起される。この具体性の強さが石牟礼の「村」を先鋭的にもし、また保守的にもしているといえる。そして、この両義性が石牟礼の「村」を受け入れやすくもし、また受け入れがたくもしている。

まずは石牟礼の「村」を概観するところから始めよう。

しばしば水俣病の告発者として位置づけられる石牟礼は、むしろ、単なる公害反対運動の闘士ではないとしても、やはり水俣病と切っても切れない関係にある。

「そしてやっぱり患者さん、そういう日本の庶民の原像に知識人とか権力者というのはそういう庶民達が日常表白している、表現者としてもひとつの世界に通暁してる存在に、案外気がおつきでない。じつに豊饒な世界なんですけど。あのたまたまわたくしは水俣病がなければ、自分がそこに生まれ育った世界をこれ程ふかぶかと覗いたであらうかと思うんですけど。」³⁴⁾

と述べ、水俣病が地域の生活に注目する契機となった経緯を語っている。こうして、石牟礼は、この豊饒な庶民の世界を描き出すこと、同時にそれを破壊した近代化という名の暴力を描き出すことを自らの仕事としていく。鮮烈なデビュー作となった『苦海浄土』において、

「水俣病もイタイイタイ病も、谷中村滅亡後の七十年を深い潜伏期間として現れるのである。新潟水俣病も含めて、これら産業公害が辺境の村落を頂点として発生したことは、わが資本主義近代産業が、体質的に下層階級蔑視と共同体破壊を深化させてきたことを示す。」³⁵⁾

と述べているように、辺境の村落が資本主義によって破壊されてきたことを、庶民あるいは下層民の世界と近代世界との対比において描き出すこと、あるいはそれらを前近代と近代の二重性においてみるのが石牟礼の作品基本的な構造となる。

そこでまず、石牟礼の「村」が先鋭的に近代批判となっている様子を確認する。

「この世の惨苦の奥にあるものは何であろうか。文筆の徒にしてこの世の実存の本体に相まみえることは冥利

につぎることである。実存世界はつねに一切世界の病を身に負う体现者としての下層民の世界である。：

わたくしは、おのれの水俣病事件から発して足尾鉍毒事件史の迷路、あるいは冥路のなかにたどりついた。これは逆世へむけての転生の予感である。もはや喪われた豊饒の世界がここにある。人も自然も渡良瀬川の魚たちも尾の山沢の鹿たちや猿たちも。

そのようなものたちを心の底に恋い暮らすよりはかに、いまの日本のごときに生きていられようか。³⁶」

実存世界、下層民、豊饒の世界といった言葉が一連の言葉として関連している。では下層民とは何か。これは文字通り、地域社会のなかで最底辺に位置づけられている人びとであるといつてよい。ここで最底辺というのは、たとえば水俣病に関して石牟礼が述べている言葉を引用してみよう。

「そういう人たち——主として漁師さんになるわけですが——は、水俣という地域社会が形成されていく過程で一番村の中核を形成していく地つきの人たちじゃなくて、村の周囲で、水俣村の一番周辺のところ、海にずり落ちないように、村から町に、町から市になっていくその一番外側のところで暮らしている人たち、その人たちは、もともとから土地に住んでいる土着の人たちからは『あれは天草のもんだ』とか、いくらか蔑視をこめた形でいわれ、それでもなおかつ水俣の共同体の中では情情的に思えば切ないほど一番水俣を愛していた、水俣市が発展していくにつれて何のおこぼれもえられなかった、恩恵に浴していなかった、そういう人たちが一番水俣を大切におもってきた、と私は思うんです。そして、そういう優しい人たちが水俣病になるわけです。³⁷」

こうした故郷を失い、そしてまた地域社会の中核から疎外された人びとが石牟礼のいう下層民である。近代化の恩恵に浴すことなく、そしてそうした近代化の対極に位置しつつ、しかも、近代化では得られない豊かな生活をおくっている人びとが石牟礼のいう下層民である。下層民の生活は石牟礼の描くところ、貧困どころか豊饒そのもの

である。『苦海浄土』のハイライトの一つである「ゆき女聞き書き」の主人公である坂上ゆきの漁師生活は海と一体となった豊かな生活として描かれる。

「わが食う魚（いお）にも海のものには煩惱のわく。あのころはほんによかった。」⁽³⁸⁾

「春から夏になれば海の中にもいろいろの花の咲く。うちたちの海はどんなにきれいかりよったな。：

わけても魚どんがうつくしか。いそぎんちゃくは菊の花の満開のごたる。海松は海の中の崖のとっかかりに、枝ぶりのよかとの段々をつくつとる。…

そんな日なたくさいあをさを、ぱりぱり剥いで、あをさの下についとる牡蠣を剥いで帰って、そのようなだしで、うすい醤油の、熱いおつゆば吸うてごらんよ。都の衆たちになとてもわからん栄華ばい。」⁽³⁹⁾

このような描写は、人間と自然とが一体となった世界であり、こうした世界はまた「生類世界」ともいわれる。

「太古の神秘と生命とを保ち、いついかなる時にも、この列島の先住民であった漁民たちと、そのような存在を育み続けてきた、わが不知火海。

第一次産業と従事者という風に分類され、もつとも未分化な階層と思われていた漁民たち。

人類の歴史の中で、文明の形態にも悪進歩にも、もつとも犯されなかった、すなわゆるヒトたちが、ここにいた。

このヒトたちが、海という生命界とともに、絶えない潮のように生きていたことは、おもえば、人類にとつて、のこされた豊かさであった。そのような海とヒトを持つていたことは、人類のいのちの系が、生命界に、あの自然界に、まだしつかりと、結ばれていた証拠でもあった。⁽⁴⁰⁾

こうした生類世界が石牟礼のいう「村」の世界である。この「村」が近代社会と対比されるとき、その「村」の相貌は鋭い批判の姿を見せる。この批判の力は、いくつかの層をもっている。一つは、価値の逆転である。石牟礼

はしばしば都市と農村を対比させ、一般に高度経済成長による都市化の進展が豊かな社会をもたらしたという認識に對して、明確な拒否の態度を示す。たとえば、「真の悲惨は、このような共同体の存在を気づかず黙殺して来て、経済成長とかいうものを取替えて感じない日本近代主義の幻想ではあるまいか。」⁽¹⁾という文言にしても、あるいは「見渡して△村▽でないものを私は嫌悪する。町とか、市とか、なかんずく都市とかを。」⁽²⁾

近代化から取り残された下層民の世界に息づく豊饒な世界、この世界の豊かさは都市などで享受される豊かさとはまったく質が異なり、ここにこそ人間と自然とが結びついた世界があるというのが石牟礼の文章が訴える事柄である。都市と村の価値の転倒。あるいはここにエコロジーの思想を見出すことも可能かもしれない。いずれにして、経済一辺倒の世界に対する強烈なアンチテーゼである。経済成長の伸びが鈍化し、また公害や地域破壊が社会問題となってきた時代を考えると、これは無視できない主張であったろう。

こうした価値の転倒は、科学信仰に対するアンチテーゼとしても出てくる。これは、例えば、『苦海浄土』において次のような形で見出すことができる。『苦海浄土』のゆき女聞き書きの部分であるが、医学的な所見と石牟礼が描く坂上ゆきの状態の落差に、これが表れている。次のような記述である。

「三十年五月十日発病、手、口唇、口囲の痺れ観、震しん、言語障碍、言語は著名な断綴性蹉跌性を示す。歩行障碍、狂躁状態、骨格栄養共に中等程度、生来頑強にして著患を知らない。」などの医学的所見に對して、
「ここではすべてが揺れていた。ベッドも天井も床も扉も、窓も、揺れる窓にはかげろうがくるめき、彼女、坂上ゆきが意識を取り戻してから彼女自身の全身痙攣のために揺れ続けていた。あの昼も夜もわからない痙攣が起きてから、彼女を起点に親しくつながっていた森羅万象、魚たちも人間も空も窓も彼女の視点と身体からはなれ去り、それでいて切なく小刻みに近寄ったりする。」⁽³⁾

近代科学の言葉では人間の実存世界を捉えることはできないという、石牟礼の洞察をここに見ないわけにはいかない。こうした見解は、裁判などの近代用語の世界への不信を表す表現などにも見られる。「法廷でやりとりされる人道的とかいう論理は、患者たちの、日常の情念にとつては、それはたてまえ用の正義ではあつてもなにやら身につきえない用語世界のことからでもある。」⁽⁴⁾

批判のいま一つの層はこの価値の転倒を超えた、世界の基盤喪失という批判である。水俣病の原因企業であるチッソによる汚染を石牟礼は次のように表現している。

「この企業体のもつとも重層的なネガチーブな薄気味悪い部分は、ある種の有機水銀」という形となつて、患者たちの「小脳顆粒細胞」や「大脳皮質」の中にはなれがたく密着し、これを「脱落」させたり「消失」させたりして、つまり人びとの死や生まれもつかぬ不具の媒体となつていにも、それは決して人びとの正面からあらわれたのではなかった。それは人びとも心も許している日常的な日々の生活の中に、ボラ釣りや、晴れた海のタコ釣りや夜光虫のゆれる夜ぶりのあいまにびっしりと潜んでいて、人びとの食物、聖なる魚たちとともに人びとの体内深く潜り入ってしまったのだった。」⁽⁵⁾

この認識を突き詰めれば、世界は近代化から逃れる場所を失つたということにもなる。たとえば、「人間と自然とが全然分離しないで、ありとあらゆる生命の世界というのが、全然分離しなくて一緒に生きていた、そういう全的な世界が、少しずつ少しずつ具体的に奪いとられていったのが、水俣病」であるとも述べている近代化の及んでいない世界を下層民の世界に見出した石牟礼にとつて、世界の基盤の確かさがゆれることは、下層民の世界の基盤がゆれるということでもある。その意味で、「水俣病は文明と、人間の原存在の意味への問い」なのである。⁽⁶⁾ この二つの層あるいは視点を統合するのは困難な作業である。石牟礼の作品世界は、こうして近代化の及ばない世界と

しての下層民の世界という視点と、世界がその基盤まで近代化によって汚染されてしまい、豊饒な「村」的生類の世界は失われたという視点とが入り混じっている。

これは、言い換えると、『苦海浄土』の中で圧倒的な筆力で表現された生類世界、すなわち「村」は、他方でその現実的基盤を失う、あるいは失いつつあるということにもなる。したがって石牟礼のその後の作品群は、「村」の存在の確認を主要なテーマとして含むことになり、柳田国男や宮本常一、林竹二らへ石牟礼が関心を示すのも当然のことということになる。他方で、小説世界において、「村」を生き生きと描き出すことで、「村」の手触りを読者に伝えることになる。こうして石牟礼の「村」は近代化の反転した鏡として、先鋭的な批判の立脚点であるとともに、古い日本の共同体への憧れとして、保守的な懐古性を帯びることになる。

しかし、公害問題や開発政治による地域破壊が次第に沈静化してくると、石牟礼の「村」は批判の立脚点としてよりも、懐古的な共同体探しの様相を呈することになってくる。これはたとえば『天湖』において明確である。

小説『天湖』は、ダムに沈んだ「天底村」を都会から来たひとりの男が訪ねる物語である。主人公の男が、自分の祖父の暮らした、そして今はダムの底に沈んだ村を訪ねることで、次第に自分の中にある「村」への希求に目覚めるといふ物語である。かつてあった村は、あるルートでこの世と繋がっている。主人公は、このルートを見出し、かつてあった村を体感するのである。物語で石牟礼は「村」の様子を描写するが、すでに消失した「村」を訪ねるという物語は、たしかに幻想的で独特の物語世界を作っており、主人公が見出したのは近代化によって失った「もう一つのこの世」であるのかもしれないが、しかし、ここに懐古的心情以上のものを見出すことは困難であると言わざるを得ない。

「ビルの林立する頂にわずかに残る夕映えにも、気がついていないのやら、いないのやら、息せききって地表を擦

傷せずにはいられない人間たちの衝動はどこから来るのだろうか。目には見えない大きな手が伸びてきて、この列島の人口密集地の表皮、いやその下の真皮をひっぺがそうとしている気配が感じられないか。車という車たち、万博建築見本市風の街のモザイク、それを全部乗せたまんま、かの大きな手が大地の真皮をずりりとひっぺがすではないか。⁴⁸⁾

こうして石牟礼の「村」は、われわれの存在の基底には人と自然、人と人との共同性があるはずである、あるいはなければならぬということを想起させる点で、今日に至るまでその批判力を失っていないといつてよい。しかし、同時にそうした共同性の世界は、それを具体的な相において把握しようとする、懐古的に再構成されるほかにないということをも思い出させてくれる。しかも、そのような「村」は国家権力への抵抗の拠点として定礎されるとき、その「村」自体は政治的・経済的権力が無化した共同体という様相を呈することになる。石牟礼の「村」は、近代化された市民社会に対抗する下層民の世界であり、権力関係に規定された国家に対抗する人と自然とが融合した無権力世界なのである。

しかし、こうした反国家権力という枠をはずしたとき、さらに近代化によって世界の基盤が堀りくずされるとき石牟礼の「村」はどこにいくのであろうか。

結びにかえて

本稿では谷川と石牟礼について、彼らの「村」概念の意味するところをみてきた。谷川雁の「村」は、その抽象性において、一種のユートピアとしての力をもち、現実をトータルに否定する視点を提供するものであったといえ

る。どこかにある、あった村ではなく、どこにもない村であるからこそ、行動の指針として一つの極点たりえたのである。もちろん、それを極点たらしめていたのは、社会から、あるいは権力から疎外され、周辺化された人びとの存在であった。ユートピア的「村」は、こうした疎外状況にある人びとの共同体の夢を乗せる対象となったのである。これは石牟礼についても同様である。石牟礼の「村」は谷川と比べると、水俣という具体的地点が示されるため、ユートピアというにはあまりに現実的な具象である。しかし、石牟礼が描く水俣の漁民の世界は、やはり疎外された人びとの世界である。これは、いかなれば、ネガとしての近代世界に対するポジとしての共同体である。そのポジの世界そのものには権力も支配もない。自然とともに豊かな暮らしをおくっている民衆の世界である。これもまた一つの夢ではあろう。石牟礼自身が至るところで書いているように、現実の村はそのような平和な世界ではなかった。差別や排除といった苦しみのある苦い部分を併せ持った世界である。が、近代を批判する「村」の世界は生類の世界として反転した近代である。渡辺京二の言葉で言えば「もうひとつのこの世」ということになる。

「村」的共同体のこうした性格は、この共同体観が、近代世界に対するトータルな批判として有効であるためには、批判対象となる社会に匹敵するトータルな社会像をもたねばならないということを示している。部分改良ではなく、一個の全体としての共同体、しかも疎外のない小共同体の夢を提示することこそ、「村」と表現された共同体の本質であったといえる。かくして「村」は自己完結のコミュニティなのである。これは昨今はやりの中間団体としてのコミュニティなどとはまったく異なる概念として位置づけられなければならない。

しかし、こうした可能性を掲げるには、現実の社会はあまりに巨大で、またあまりに複雑で、なおかつあまりに深く人びとの生活に浸透していた。このような状況で、社会の全体的変革を訴えるのは、もはや一つの幻想となる。新しい共同体像としての「村」は、社会をトータルに批判するには有効な視点であるとしても、具体的行動のレベ

ルでは有効性を期待できるものではない。であるとすると、社会を変えるのは、実際的には、松下圭一が述べたように、「賃金プラス社会保障・社会資本・社会保険の水準向上なくして、コンミュニオン論ないし疎外論も空転するのみである」ということを否定するのは困難な社会であった。⁽⁴⁹⁾

むしろ、疎外された人びと、周辺化された人びとへの視線は、大嶽秀夫がいうように、ポストモダンの思想を先取りしていたといえなくはないが、しかしそのことは、大嶽が新左翼について指摘したこと、つまり「先進諸国の先端的左翼運動が（マイノリティという）現代社会の周辺的問題しか争点にしえなくなったことを意味している」⁽⁵⁰⁾がそのままではまる事態でもある。問題が社会全体としてではなく、局所化され、部分の問題として捉えられるようになるとき、「革命」という全体的変革は時代にそぐわない主張となる。谷川が筆を折り、石牟礼の生類世界が小説の世界へと後退するのは避けられない事態であったのかもしれない。

とはいえ、近年、彼らが「村」的共同体で救おうとした疎外された人びとが現代日本において周辺的であるともいえない事態が出てきているともいえる。とすると、彼らが問うた疎外の克服という古い問題は、それほど古色蒼然というわけでもないともいえる。トータルな変革の夢が潰えた後に残るのは、疎外という問題状況であるとする、今後どのような社会像を描くことができるか。これは将来の課題として残るのではなからうか。

注

- (1) さしあたり、『ジュリスト総合特集…現代都市と自治』一九七五年、『ジュリスト総合特集…現代人の生活拠点』一九八〇年、岩本由輝『柳田國男の共同体論―共同体論をめぐる思想状況』御茶の水書房、一九七八年、中村吉治『日本の村落共同体』ジャパン・パブリッシャーズ、一九七七年、『共同体論―その原理と構造…伝統と現代保存版』伝統と現代社、一九八〇

年を参照。

- (2) 典型的には守田志郎『小さい部落』朝日新聞社一九七三年、『日本の村』朝日選書一九七八年参照。
- (3) 思想の科学編『共同研究―集團―サークルの戦後思想史』平凡社一九七六年、七十一頁。
- (4) 同右、同、七十二―九十二頁。
- (5) 同、八十九頁。
- (6) 谷川雁『サークル村』創刊宣言。『サークル村』については、不二出版(全三巻、二〇〇六年)の復刻版を用いた。
- (7) 石牟礼道子『流民の都』大和書房、一九七三年、二百八頁。
- (8) さしあたり、サークル村については、先の『集團』以外に大沢真一郎『後方の思想』社会評論社、一九七一年、松原新一『幻影のコミュニケーション―サークル村』を検証する『創言社、二〇〇一年、新木安利『サークル村の磁場』海鳥社二〇一一年、水溜真由美『サークル村』と森崎和江…交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版二〇一三年、佐藤泉『一九五〇年代、批評の政治学』中央公論社、二〇一八年、木原滋哉『対抗的公共圏の構想と実践―サークル村』から大正闘争へ』呉高等工業専門学校研究報告第六十八号二〇〇六年などを参照。谷川については、右のサークル村研究と重なる部分も多いが、右のほかに、黒田善夫『詩と反詩』勁草書房一九六八年、平岡正明『平岡正明評論集 地獄系二十四』芳賀書房一九七〇年、『現代詩手帖 特集谷川雁』一九七六年七月、長崎浩『超国家主義の政治倫理』田畑書店一九七七年、異色の谷川論として米沢慧『都市の貌』冬樹社、新装版は一九九〇年、初版は一九七九年、佐藤泉『共同体の再想像…谷川雁の「村」』日本文学』五十六号、二〇〇七年、大嶽秀夫『新左翼の遺産―ニューレフトからポストモダンへ』東京大学出版会、二〇〇七年、松本健一『谷川雁…革命伝説―一度きりの夢』増補新版、辺境社二〇一〇年、KAWADE道の手帖『谷川雁―詩人思想家、復活』河出書房新社、二〇〇九年。石牟礼に関しては、さしあたり渡辺京二『もう一つの世―石牟礼道子の宇宙』弦書房二〇一三年、同『預言の哀しみ―石牟礼道子の宇宙Ⅱ』弦書房二〇一八年、岩岡中正編『石牟礼道子の世界』弦書房二〇〇六年、伊藤洋典『∧共同体∨をめぐる政治学』ナカニシヤ出版二〇一三年を参照。

- (9) 森崎和江、『闘いとエロス』三一書房一九七〇年、一三二頁
- (10) 谷川「観測者と工作者」米谷匡史・岩崎稔編『谷川雁セレクションⅠ』日本経済評論社二〇〇九年、一三八―一三九頁
- (11) とはいえ、この集団の実態的な支えは共産党であり、また八幡製鉄などの大企業を中心とする企業内組合の組合員であった。ここにはこの集団が政治闘争のための集団としての顔を持たざるを得ない、その意味では大きな葛藤を内部に抱え込むことになる構図が見て取れる。
- (12) 佐藤泉「共同体の再想像…谷川雁の村」前掲四四頁
- (13) 同右、四三頁
- (14) 森崎和江「サークル村の一年と現在地点」『サークル村』一九五九年十月
- (15) 水溜真由美「谷川雁の共同体論とサークル構想(上)」『思想』二〇〇九年五月、八八―九三頁
- (16) 『谷川雁セレクションⅡ』、二八頁
- (17) 同右、三四頁
- (18) 『谷川雁セレクションⅠ』、一二五頁
- (19) 『谷川雁セレクションⅡ』、四八頁
- (20) 鮎川信夫・北川透・菅谷規矩雄「途方もない一回生の夢」『現代詩手帖』一九七六年、七月、七六頁
- (21) 『サークル村』、五九年一月、一三頁―一五頁、星野正幸の文章
- (22) 『サークル村』、五九年十二月三十頁、平野滋夫の文章
- (23) 磯田光一「村落のパラドックス―谷川雁における自詔の感性」『現代詩手帖』前掲、一〇六頁。磯田は、谷川におけるヴィジョンとしての村落と現実における村落の裂け目について言及している。夢の開示と現実的対応物の二元性が谷川の村落の本質であったと述べている。
- (24) 『谷川雁コレクションⅡ』前掲、五六頁

- (25) 同右、四八頁
- (26) 同右、四九頁
- (27) 小野十三郎「コンミュンブクリ」『現代詩手帖』、前掲、四四頁
- (28) K・マンハイム『イデオロギーとユートピア』高橋徹・徳永恂訳、中央公論社、一九七九年、三〇九頁
- (29) 同右、三一一頁
- (30) 同右、三三三頁
- (31) ちなみに、長崎浩は「原点」は共産党のことであると語り、当時の谷川の周辺は、この言葉は当然に党のことだと了解したと述べている。長崎前掲、二二五頁
- (32) 『谷川雁セレクションI』、一三〇ページ
- (33) 『サークル村』五九年三月での山南仁治の記述
- (34) 石牟礼道子『流民の都』前掲、三三七頁
- (35) 石牟礼道子『苦海浄土』講談社文庫一九七二年、二七四頁
- (36) 『流民の都』前掲、一九六頁
- (37) 同右、四一頁
- (38) 『苦海浄土』前掲、一三二頁
- (39) 同右、一四二―一四三頁
- (40) 『流民の都』前掲、一七頁
- (41) 同右、二二三頁
- (42) 同右、一一五頁
- (43) 『苦海浄土』前掲、一二七頁

- (44) 『流民の都』前掲、二八頁
- (45) 『苦海浄土』前掲、一二四―一二五頁
- (46) 石牟礼道子『蟬和郎』葦書房一九六六年、一八〇頁
- (47) 『苦海浄土』前掲、二二三頁
- (48) 石牟礼道子『天湖』毎日新聞社一九九七年、八九頁
- (49) 松下圭一『シビル・ミニマムの思想』東京大学出版会一九七一年、三〇〇頁
- (50) 大嶽秀夫『新左翼の遺産』前掲、二六頁